

私は将来、高校教師になりたいと思っている。これまで先生との良い思い出がなかった私がそう考えるようになったのは、高校でたくさんの素晴らしい先生方との出会いがあったからである。その中でも私は一人の先生に深く影響された。

私には苦手な教科がある。高校1年生の1年間、その教科担任であった先生は、最初の授業で自己紹介もなく授業を始めた。授業のスピードは速く、内容も難しかったが、自分の苦手教科とは思えないほどわかりやすく教えていただいた。また、先生は授業の合間に様々なことを聞かせてくださった。大学進学の話だけでなく、大企業がどんな人物を欲しているかや社会の詳しいしくみ等、将来が楽しみになる話題であった。そして授業後、思い出したように名前を名乗られ、颯爽と帰っていかれた。

その先生の話の中で特に印象に残っているものは、私が職員室に質問をしに伺った際に聞かせてくださった、教師という仕事に対する先生の思いだ。「自分はこの仕事を天職だと思っている。たとえ給料がもらえなくなってもこの仕事を続けたい。」私はこの言葉を聞いた時にとっても衝撃を受けた。

「教師」という仕事は、休み返上で働くわりに給料が見合わないブラック企業のような仕事で、教員不足と叫ばれる中、労働時間を大幅に超える仕事や、部活動や学校運営の業務といった、授業とは別の仕事などに毎日追われる大変な職業だというイメージがあった。さらに私は小学校、中学校では先生に対する良い記憶がなく、学校の先生だけにはなりたくないと思っていた。

そんな私が自分の進路に対して真剣に考え始めたきっかけもまた、この先生だった。定期テストでの結果が悪く落ち込んでいた時に、先生は私に「お前は将来、何になりたいんだ？」と聞かれた。私は何も答えることができずにその場から逃げ出してしまった。なぜなら、自分が何をしたいのか分からなかったからだ。先生はそんな私を見透かしていたのだと思う。しかしその後、自分の将来について具体的な職業も含めて考えてみたところ、浮かんできたのは高校の教師だったのだ。それはきっと、先生が熱く語っていた教師の世界に興味を持ったからだろう。

先生に決意を伝えたのはかなり時間が経ってからであった。先生はいつもの雰囲気とは少し違う様子で、「あなたと一緒に働く日を楽しみにしています。」と言葉をかけてくださり、私はそれがとても嬉しかったのを今でも覚えている。

2年生に進級して始まった「総合的な学習の時間」では、学校教育について調査と研究を行った。カリキュラムや授業に対する先生と生徒の考え方の差に着目し、アンケートやインタビューを通して、先生も生徒も楽しいと感じ、かつ生徒の学力向上にも結び付く授業のあり方を創造してみた。調査の結果、生徒から人気の高いグループ活動や、調べ学習の後に研究発表を行うアクティブラーニング型授業は、内容やテーマが理解できなくても

授業に参加している気分を味わうことができるが、知識や発展的な内容に活用することが難しいため、実践で生かすことができるかどうかについては、生徒の基礎学力によって個人差が見られることが分かった。さらに、教師からの視点として、答えが一つに定まらない問いに対し意見交流を行うなど、自主性を発揮できる場を設ける授業については、必要であるものの、やる気や学力の差があり難しい場合があることが分かった。

こうした調査を踏まえ、先生の受け持つクラスの授業時間を1時間いただき、私の計画した授業内容を先生に行ってもらった。決めた範囲を一から学びなおし、プリントを作成した。授業の前後で生徒に取ったアンケート結果と先生の感想から、教師が教えることの重要性が問われる一方で、生徒の自主性にまかせると、得意な生徒と不得意な生徒との間の差が明確に現れることが改めて感じられた。この研究結果を活用して、将来私が授業を行うときには、さらに研究していきたいと思う。

学校の現場は、小・中・高を問わず全国的に苦しい状況かもしれない。しかし、それならば、まず私が声を上げ、働きやすい環境に、子供が憧れる職業に、変えていきたいと思う。なぜなら、屋久島高校の先生方が、夜遅くまで、加えて休日にも学校に来て仕事をして、「お前らが来年の三月に笑って卒業できるために頑張るよ」と笑っておっしゃる姿を見て、こんな大人に、こんな先生になりたいと強く思うからだ。